

マニャガハ島



遠浅の白い砂浜に縁取られた周囲 1.5 キロメートルの小さなのどかな無人島。約 20 分ほど歩けば島を一周できる。マニャガハとは、チャモロ語で「一時休憩」を表す。かつては、先住民民族キャロリニアン人の聖地とされていた。

しかしサイパンの日本統治が始まると、サイパンの中心地ガラパンの沖に位置するため、軍事要塞化され「軍艦島」と呼ばれるようになった。

そのわりに大戦中米軍の攻撃を受けなかったのもともとサイパンに育っていたガジュマルの樹などが茂り、かつての緑豊かなサイパンの面影をしのぶことができる。日本軍の大砲やトーチカもそのままビーチに放置されている。島の周辺の海中には、戦闘機（ガイドブックには「ゼロ戦」と誤って書かれていることがあるので注意）や、米軍によって沈没した日本輸送船（これは魚が集まるため、ダイビングスポットとされている）なども見ることが出来る。

戦後、日本資本によって観光地としての再開発が始まると、先住民チャモロ人、キャロリニアン人の人々はしばらくの間この島への立ち入りを禁止され、島周辺で漁もできなくなった。

今日サイパン本島のガラパンからは、小型船で 15 分程度（往復 35 ドル—約 3500 円）で島を訪れることができる。島に立ち入るものは全て 5 ドルの入島税を支払うが、これは島の環境保全のための資金となる。マニャガハ島は、一時観光客が増えすぎて、環境汚染の危機に直面したが、それを克服してバイオテクノロジーを駆使したトイレやシャワーを設置。いずれはマニャガハ島内の電力全てを太陽エネルギーで供給し、エコロジーの精神あふれる島に戻す計画だ。かつて島周辺の海を汚染しかけた

観光客が出すゴミ問題も、解決させつつある。そしてマニャガハ島は、世界三大ダイビングスポットの1つとして再び脚光をあびるようになった。

マニャガハ島では、ダイビングだけでなく、バナナ・ボートからパラセーリングまで、幅広くマリンスポーツが楽しめる。島で働くスタッフは日本人が多く、観光客の多くも日本人で、日本語が飛び交い、あまり外国を感じさせない。しかしサイパンに行ったら、チャモロ・キャロリニアン文化への尊敬の気持ちをもって、訪れてほしいスポットの一つである。



その昔、キャロリニアンをサイパンに導いたアグルブ酋長像



珊瑚などの生態系を破壊する恐れがあるため指定遊泳区域外での遊泳を禁止するポスター。



ガジュマルの樹
サイパン本島では、空襲で消滅してしまった



島の北部には、政府管轄の自然保護団体に守られたミズナギドリの繁殖地がある。写真は幼鳥。



今も残る戦跡

